様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１２６０３
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１２４３３

研究課題名（和文）母語話者と非母語話者による成員カテゴリーの交渉と社会的行為について

研究課題名（英文）Membership Categorization and Social Acts in Conversations between Japanese Native Speakers and Non-Native Speakers

研究代表者
嶋原　耕一（SHIMAHARA, KOICHI）

東京外国語大学・世界言語社会教育センター・講師

研究者番号：００８０５１８７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,400,000円

研究成果の概要（和文）：日本人学生と留学生のグループディスカッション場面を録音・録画し、カテゴリーと行為連鎖という観点から、会話分析の方法を用いて分析を行った。特に国事情について問う質問から始まる質問応答連鎖に注目し、応答者が様々な資源を用いて第三者の介入を引き込む様子を分析した。そしてそれにより、参与者らが集団の水準で応答を産出するということ、知識の共有を共有していない相手に見せることで異文化性が達成されていることを記述した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本語教育分野では、接触場面におけるカテゴリー交渉について、いくつかの研究がなされてきた。しかしそれらの研究では、母語話者から学習者へのカテゴリー化が学習者の自由な会話参与を阻むものとして扱われることが多く、カテゴリー化がもたらしうる他の帰結が、十分に注目されることがなかった。本研究では、質問応答連鎖においてどのように特定のカテゴリーがレリバントになるのかに注目し、帰結として異文化性が達成されることを記述した。そのような側面に光を当てたことに、研究の意義があったと考えている。

研究成果の概要（英文）：Group discussion data between Japanese and international students were recorded and analyzed from the perspective of categories and action sequences, using the method of Conversation Analysis. In particular, question-answer sequences that began with questions about a country's situation were collected and the way the answerer solicits a third party’s intervention in those sequences was analyzed. It was described that by soliciting a third party's intervention, an answerer could produce a collective-level answer on the country’s situation, which demonstrated shared knowledge among participants. Consequently, it was described that interculturality was locally achieved in the sequence.

研究分野：日本語教育

キーワード：会話分析　異文化性

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１。研究開始当初の背景

研究を始めるきっかけとなったのは、報告者が持っていた以下のようなデータの観察である。

断片 1（奈美=日本人学生、メイ=中国人留学生）

```
01 メイ:  あでもまだ若いから　あの:(0.4)親は何も,
02          お- お- ご両親は>何もあの：<(0.4)言わないです？
03          そういうことは.
04 奈美:  でも言ってるお母さん あんた結婚できるの? とかって.
05          彼氏いない(h)じゃん(h)とかって. [huhuhu
06 メイ:                                     [あ:::
07 奈美:  >分かってるよ：<って
08 メイ:  ↑え >でも<日本人は <そんなに>急いでないみたい.
09        (.)
10 奈美:  そう?
11        (0.4)
12 奈美:  そうなのかな？=((軽く首を傾ける))
13 メイ    =え結婚は普通=平均年齢(。)日本は中国よりは:うん
14        (0.6)
15 メイ:  [遅いん>じゃ[ないですか？<]
16 奈美:  [遅い?       [あ　そ う か] もね.
17        中国って何才ぐらい？
```

断片 1 では、04 行目から 06 行目で奈美が自身の結婚を親に心配されることについて話しており、「分かってるよ：」(07 行目)により、親に対する不満を表している。そのような不満の表明に対して、中国人留学生であるメイは、「でも日本人はそんなに急いでないみたい」と意見を述べる。この意見は、「日本人はみな結婚を急いでいないから、奈美も焦る必要はない」という、ある種の連携の表明に聞こえる。ここでメイは、奈美の母親でなく奈美の側にいること、つまり奈美の味方であることを表明しているのである。そして、その連携の表明とともになされているのが、メイの「日本人」としてのカテゴリー化である。会話における一般化については、Pomerantz(1986)も「ある行動が頻繁に起こること、または一般にされていることであると示すことで、それが間違ったことではないこと、あるいは正しいことではないことを提示する」と主張している(p。220、著者訳)。

カテゴリーの概念を用いる多くの会話分析研究では、「日本人であること」や「外国人であること」を所与のものではなく、相互行為により交渉され、達成されるものと考える。カテゴリーに関する研究は多く、「男性／女性」「素人／玄人」「教師／学生」「大人／子供」など、種々の会話で観察される多くのカテゴリーが、その分析対象とされてきた。しかし、接触場面におけるカテゴリーの交渉を分析対象とする研究は少ない。そ

してその少ない研究のほとんどが、誤用訂正や言葉探しの補助など、母語話者の行為に注目している。例えば代表的な先行研究である杉原（2003）は、ある地域に住む母語話者と非母語話者の話し合いにおいて、母語話者による「日本は」や「みなさんの国で」に続く質問と日本語の説明により、話者が「日本人／○○人」としてカテゴリー化される様子を、記述している。そしてそのようなカテゴリー化が、非母語話者の「自由な発言を阻み無理に受け手を「日本人／外国人」カテゴリー対に当てはめていく現象まで起こる」こと、つまり権力作用として機能しうることを、指摘している（p.16）。

しかし実際には断片 1 のように、非母語話者（メイ）による行為がカテゴリー化のきっかけとなることもあれば、それらのカテゴリー化により両者の距離が縮まり、会話が盛り上がることもある。ここで重要なのは、接触場面におけるカテゴリーを一括りにするのではなく、それぞれのカテゴリーがどのような社会的行為のためにデザインされているのか、明らかにすることだと考えた。以上が研究開始当初の背景である。

２。研究の目的

本研究では、母語話者と非母語話者による会話における、カテゴリーに注目した。相互行為の中で、参与者が有する数ある社会的カテゴリーから、いかにして特定のカテゴリーがレリバントになるのか、それによりどのようなことが達成されているのか記述することを目指した。

３。研究の方法

研究の方法として、データ収集と分析方法を以下に順に記す。

データ収集では、日本人学生と留学生を所属大学の教室に集め、①自己紹介と②ディスカッションからなるグループ活動の様子を、録音・録画した。グループは日本人学生と留学生 2 名ずつの 4 名から構成され、10 分の①自己紹介と、50 分の②ディスカッションに取り組んだ。3 日間にわたって学生に協力を仰いだ結果、参加者は延べ 48 名（日本人学生 24 名、留学生 24 名）となり、計約 720 分（60 分×12 グループ）のデータを収集することができた。①と②のデータを収集したのは、ディスカッションというタスクを強く意識する場面と、そのようなタスクを意識しない場面の両方を、分析対象とするためである。

分析方法には、アメリカの社会学者 Harvey Sacks らが発展させた会話分析（Conversation Analysis）の方法を用いた。

４。研究成果

分析の中で特に注目したのは、「日本で○○することは失礼ですか？」などの国事情について問う質問から始まる質問応答連鎖である。データ内では繰り返し、そのような質問に対して第一応答者が応答する最中に、第二応答者の応答を引き込むという現象が観察された。一つ例を提示する。

断片２

```
01 カイ: 行かない>ですか<.
02       hh[h
03 美緒:   [<行かない[:>
04 カイ:             [(  [    )
05 ソア:                  [>でも<
06       >日本人ってすっくないかな?<
07        <大学[(院に)> [いく人
08 乃枝:       [°(あ:)°
09 美緒:       [°ん:°    [え 大学院
10       いく[人ってほんと[に勉強
11 ソア:     [°少ない°
12 乃枝:                  [>ほんとに<
13       研究:[者になりたい[系の=
14 美緒:       [うん
15 ソア:                  [↑あ:::
16 乃枝: =人し[かあんま[り:
17 美緒:       [そうだね
18 ソア:                 [>そうだよね<
19       みんな>就職するんだよね<
```

断片 2 のグループメンバーの内、カイのみが大学院生であり、他は学部生である。断片の直前では、カイが「大学院に行く予定があるか」という質問を他のメンバーに投げかけ、全員が行くつもりはないと応答していた。05 行目から始まるソアの質問に注目しよう。このときソアは視線を美緒に固定させており、美緒を質問の宛先とする。ソアは、日本の事情に関する質問を日本人学生に宛てることによって、この場でそれについての知識をより多く有しているのは日本人学生であるという期待を提示している。

質問を宛てられた美緒は、同じ日本人学生である乃枝に視線を移動させながら、「え」と応答を開始する (09 行目)。そして視線が乃枝に到達した直後、「大学院いく人ってほんと」と続ける (09-10 行目)。乃枝はというと、美緒に視線を向けられた直後に美緒を見返し、美緒の TCU 完了を待たずに「>ほんとに研究:<者になりたい」と応答を開始する (12 行目)。その際、「ほんとに」と美緒が直前で用いた語を繰り返すことで、自身の応答が美緒の応答の続きであることを示している。オーバーラップしている間、二人はお互いを見ているが、美緒が「勉強:」の後を産出しないことを確認すると、乃枝は質問者に向き直り自身の応答を続ける (13 行目)。それに対し美緒は、乃枝の「研究:」までを聞いた位置で「うん」と産出する (14 行目)。それによって、乃枝の「研究」が自身の産出した「勉強」に代替可能であることを示し、乃枝の産出しつつある応答に承認を与えている。

上記のような第二応答者の「引き込み」がいかにしてなされているのか、またそうして「二人が答える」ことにより、話者らが何を達成しているのか分析・考察した。「引き込み」達成の資源としては、視線の移動、知識状態への期待、発話中の応答 TCU の投射可能性などが記述された。知識は話者らの社会的カテゴリーと強く結びついており、誰がどのような知識を有しているのかということに対する期待は、相互行為の中でしば

しば表示される。分析対象とした「二人が答える」質問応答連鎖では、日本事情についての知識を共有すると規範的に期待されている二人が、その共有されている知識を集団の水準で提示する、ということがなされていた。そのように特定の国の事情についての知識の共有を、それを共有していない相手に対し実演（demonstrate）することで、担っている文化が参与者間で異なることが示されている。ここで局所的に、異文化性（interculturality）が達成されていると記述できる。

ただし、介入を要請された第三者が、いつもそれに応じるわけではない。介入が引き込まれなかった断片では、集団の水準で知識が提示されることはなく、結果として個人の水準での応答が産出されていた。したがって知識の共有が実演されることもなく、異文化性の達成も観察されなかった。

上記のように、本研究では知識共有の実演を通して、「日本文化についての知識を持っている者」というカテゴリーが相互行為中にレリバントになっている様子を記述した。知識が期待される二人が応答を産出するという現象の詳細な記述、局所的な異文化性達成の記述ができたことが、本研究の意義だと考えている。なお断片２を含めた異文化性達成の分析については、嶋原（印刷中）として論文にまとめた。

当初掲げた研究の目的は、ある程度達成できたと考えている。しかし日本語教育という分野において、本研究成果をどのように活かせるのか、いかに教育現場に還元できるのかまでは、具体的な提言をすることはできなかった。それについては、引き続き研究課題に取り組むことによって実現していきたいと考えている。

【参考文献】

嶋原耕一(印刷中).「質問応答連鎖における第三者の介入引き込みの会話分析―日本人学生と留学生とのディスカッションデータを対象として―」『社会言語科学』

杉原由美(2003).「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践―エスノメソドロジーの視点から」『世界の日本語教育』13, 1-18.

杉原由美(2010).『日本語学習のエスノメソドロジー言語的共生化の過程分析』勁草書房

Pomerantz, A. (1986). Extreme Case formulations: A way of legitimizing claims. *Human Studies*, 9, 219-229.

Sacks, H. (1972). An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (ed.), *Studies in Social Interaction*. pp.31-74. New York: Free Press.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 嶋原耕一	４．巻 -
２．論文標題 質問応答連鎖における第三者の介入引き込みの会話分析―日本人学 生と留学生とのディスカッションデータを対象として―	５．発行年 2023年
３．雑誌名 社会言語科学	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 嶋原耕一
２．発表標題 日本人学生と留学生のディスカッションにおけ る他者開始修復の会話分析―第三者の理解表明をリソースとしたトラブル解決に注目して―
３．学会等名 韓国日語日文學會2020年秋季国際学術大会（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 嶋原耕一
２．発表標題 修復シークエンスにおいてトラブルソースを常識的知識として扱うことの分析ー日本人学生と留学生によるグループディスカッションデータを対象としてー
３．学会等名 第44回社会言語科学会研究大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 嶋原耕一
２．発表標題 グループディスカッションにおける第三者の修復シークエンスの参加
３．学会等名 第2回会話分析研究発表会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関